平成六年度　春季公開　講演要旨

『紀元前』の成立
――その文化史的意義――

新村祐一郎

今日お話いたしますことは私がこゝ数年来専門の研究の合間に考えたことでギリシア史のみに関することではありません。話の内容は前半で「『紀元前』の成立」の前段階、前史として紀年法の変遷をたどり、後半で表題に掲げた問題を取り扱うことになります。しかし私がこういった紀年に関心を抱くようになったのは古代史の研究書には数多くB.C.という表記が見られるのに対して、史料となる文献には当然のことながら全く別種の表記法が用いられているということからです。したがって史料で読む年代をB.C.に置き直して用いることも研究の途上当然踏まなければならない手段であります。

ところで歴史というものを考える時、どんな歴史書にしてもまた歴史に関する書物にしてもやはり重要なのは年代というものです。つまりどういう事柄が何年に起こったか、あるいは何世紀に、あるいはいつ頃にという問に答えるのが年代に他なりません。ある特定の事件を定めてそこから年数を数える方法は古くからありますが、その際に何を紀元にするか、つまり何を基礎としてそこから年を数えるかという問題が起こります。この年代をどのように言い表すかは時と所によって大いに異なりますが、ここでは西洋、特にヨーロッパを中心として見たいと思います。

しばしはヨーロッパの前段階とされる古代オリエント（エジプト、西南アジア）などでは「何王の治世何年」という形で年代が表記されることが多い。文献的にそういった形のものが非常に多いのです。しかしそれが年代としての意味を持つには歴代の王の一覧表ともいうべきものが必要になります。事実当時王名表、王朝表というものがあり、これらの表に歴代の王名とその治世年数などが併記されております。これを利用することによってどの王朝の何代目の王の治世何年目ということを一応明らかにすることができたわけです。

それではギリシアではどうか。ギリシアという所は大体紀元前九世紀頃になると、数多くの小さな国家―一般に歴史上ポリスと呼ばれる―ができます。その国家には非常に数多くの官職がありますが、就任した官職者の任期は紀元前七世紀頃からどこのポリスでも一年に限定されます。例えばアテナイの最高官職であったアルコンというのも任期一年であり、スパルタの非常に重要な官職エポロスというのもやはり任期一年です。アルコンは毎年三人任命されエポロスの方は五人任命されますが、そのアルコンの中の一人、エポロスの中の一人がそれぞれ紀年のアルコン、紀年のエポロスと呼ばれてその人の名前によって年が確定できるというシステムがギリシアにはありました。それが歴史書の表記などにも使われておりますが、これもやはりアルコン表乃至はエポロス表というものがあって、毎年の紀年のアルコン、紀年のエポロスがそれぞれのポリスで書き記されていたためにこれが年代を確定する役割を果たしていました。例えば紀元前五世紀の後半の有名な歴史家 Thukydides は「Pleistolas がスパルタのエポロスでか

つAlkaiosがアテナイのアルコンであった年」といって年を確定していますが、これは現在の一般的な言い方に換えれば「紀元前四二一年」となります。

それからローマの共和制時代においても同じように最高の官職としてコンスルというのがあります。これは毎年二名任命されて任期はやはり一年ですが、ここではこの二人のコンスルの名前を列挙して「誰と誰とがコンスルであった年」ということで特定の年を表す方法がありました。これもやはりコンスル表とでもいうものがなければ不可能なことであります。

しかし紀元前四世紀になるとマケドニアにAlexandros大王が現れて、これまでのギリシア人には想像もつかないような広大な領域を支配する国が出現します。このような大きな国の出現によってこれまでのように一つの小さなポリスの為政者の名で年代を表記するというのでは何かと不自由を感じるので、もう少し広い領域に通用するような年代の表記法というもの、いわば紀年法というものが求められるようになるわけです。ことにAlexandros大王の死後四〇年してエジプトのアレクサンドリアに設立された総合的な研究機関ムセイオンにおいて年代学、文献学の研究も盛んに行われました。ここでギリシアの古伝承や各種の文献が蒐集され、各地のそれぞれの伝承を如何に合理的に集約するかということが検討されました。各種の伝承や歴史書の中から取捨選択することによってギリシアの伝承と歴史がどうにか一本化されますが、最後にこれに年代を与える際に基準としてトロイア陥落の年が選ばれ「イリオンの陥落以来何年」という表記で統一することが提案され、当時最大の学者といわれたEratosthenesなどによってこれが実現されたのであります。

なおトロイア戦争が史実であるか否かは今日学界で論議されているところでありますが、古代のギリシア人はこの戦争の真実性を信じて疑いませんでした。

ただギリシア世界においては以上の表記法とはやゝ異なるし、正確にいえば紀年法とはいえないかもしれませんが、オリュンピアスという年代の言い表し方があります。ギリシアのオリュンピアという所にゼウスの神殿があってここで毎年祭典が行われるが、四年目毎に大祭があり、その祭にスポーツ競技なども行われたわけであります。その第一回目の大祭が行われた年（かなり伝説的な年代ですが）から四年目までを第一オリュンピアスと呼びます。第一オリュンピアスの第四年目の次の年は第二回目の大祭があり、その後の四年間を第二オリュンピアスと呼び、その第四年目の次の年に大祭があって以後四年間を第三オリュンピアスというように回を重ねるにつれて四年目毎に一つづつオリュンピアスのナンバーが増えて行くことになります。これも起点が何時であるかが分れば、非常に年代を表すのに便利なものとなります。この方法はゼウスの祭典がローマ帝国によって禁止されるまで、即ち紀元後三九三年まで続けられましたが、それ以後はこの表記法は使われなくなりました。

ただこれらの表記法は新しい方法が開発されると古い方法が廃れていくのではなく、そのいずれもが併記されるのが普通であります。例えば紀元前一世紀に『世界史』を書いたシチリアに住むギリシア人Diodorosは、Alexandros大王の死んだ年を「アテナイではAgesiosがアルコン、ローマではGaius Publius, Papiriusの両名がコンスル、かつ一一四オリュンピアスの年」と表記しております。このように三つの年代の言い表し方を重ねて

書いているわけであります。

そのほかAlexandrosの死んだ時点から年を数えるAlexandros紀元、またヘレニズム時代のセレウコス朝の祖SeleukosNikatorが王家を確立した年を起点とするSeleukos紀元などがありました。このSeleukos紀元はシリアのキリスト教会では長らく使われていたとのことです。

一方ローマにおいては上述のようにコンスルの名による方法もありましたが、紀元前二世紀くらいになってくるとローマの領土はかなり広くなり、やがて地中海周辺全体を支配するような勢力になりますと、やはり広い地域によりふさわしい年代表記というものが考えられるようになります。ローマでは紀元前二～一世紀頃からローマの建国時期についていろ〳〵議論がありましたが、紀元前一世紀の学者（博識家）Varroの説が支配的となり、これが採用されるようになりました。これに基づいてローマ建国紀元というものが置かれるようになり、「建国以来何年」（Ab urbe condita＝A. U. C.）というように表記されます。ローマにはこの他に「共和制成立紀元」というものもあり、更にはOctavianusがAntoniusとKleopatraを破ってアレクサンドリアを占領した年も紀年として利用されることがあります。しかし後の時代に多少影響を与えたものとしては「Diocletianus紀元」があります。Diocletianusというのはローマの皇帝で紀元後二八四年に即位した人物でありますが、その当時非常に混乱していたローマ帝国は彼によって収拾されます。それと同時にキリスト教徒に対して厳しい迫害を行ったという点でもよく知られた名前の皇帝ですが、その皇帝が即位した二八四年を起点とした表記法です。このDiocletianus紀元はキリスト教徒が採用したためある程度の広がりを見せ、現在もアフリカ奥地のキリスト教徒はこれを保持しているとのことであります。

以上のように古代の紀年法には種々のものがあり、またそれが併記されていましたが、中世になると西ヨーロッパでも上層階級の間にはキリスト教が普及されたので聖書の記述に基く紀年が用いられるようになります。中世西ヨーロッパにおけるキリスト教的世界史は人間の楽園追放から最後の審判までという極めて壮大なものであります。歴史は人間の自由な意志と行為によって形成されるのではなく、神の意思によって決定されるという歴史観に基くもので、その場合人間は民族、身分の如何を問わず神の目的実現のための手段として存在理由があることになります。このような立場から歴史を書く場合「創世」（天地創造）から「最後の審判」までの全過程を辿らなければ完結したとはいえません。そこで中世では創世を起点として年数を数えることが一般化しました。もっともこれはギリシアのトロイア紀元、ローマの建国紀元と同種のものともいえますが、この創世紀元（anno mundi＝A. M.）が実はいろ〳〵な問題を含んでいたのであります。

いうまでもなく創世は宗教上の信念に基くものですが、伝説上の出来事なので、いろ〳〵な異説が生じる可能性があります。それでは誰が一番最初に創世紀元というものを考えたかということになると、四世紀のユダヤ人Rabbi Hillel Hanassiとされております。この人の創世紀元に基けばキリストの誕生というのは紀元三七六二年の出来事ということになります。つまり創世からキリストが生まれるまでの年数は三七六二年であるというように表記されております。ところが四～五世紀の有名な神学者Hieronymusの年代計算によると、キリストの誕生は旧約聖書に基いて

創世から五一九九年目の出来事となっており、後継者のOrosiusもこれを踏襲しています。ところでこの創世からキリスト誕生に至るまでの年数はそれぞれの教会によって実はさまざまに異なっております。もちろん旧約聖書の「創世紀」を読んでも天地創造が何時だなどということが明確に書いてある筈がありません。その聖書の記事をいろいろと読んで、年数なども類推に類推を重ねた上で割り出された年数なのですから人によって違う、また教会によって異なるというのは当然です。アレクサンドリア教会の紀年によると創世からキリストの誕生までの年数は五四九二年となり、コンスタンティノープル教会の紀年によると五五一〇年となります。このように各教会によって少しづつ、場合によってはかなり大幅に異なります。因みにユダヤ式の創世紀元はユダヤ人の間で広く行われていますし、またコンスタンティノープル式は東西の教会が分裂した（一〇五四年）後、所謂ギリシア正教会で使われており、ロシアで一般化されましたが、Pyotr一世の西欧化政策によって廃止されました。

それはさておいて、このように様々な創世紀元というものがあったわけですが、これに対して全く異なった紀年法が六世紀に現れます。スキュティア生まれの神学者であり、また年代記作者でもあったDionysius Exiguusが当時のローマ法王Johannes一世の命を受けて『復活祭の書』（Liber de Paschale）というものを書きます。当時一般に行われていた復活祭表はDiocletianus紀元による年代表記になっていたのですが、Dionysiusはキリスト教徒を厳しく迫害したDiocletianusの即位を紀元にするのは好ましくない、という立場から年数はキリストの誕生年を起点とすることにしました。彼はこれを「主の人の身をとり給いしより何年」（anni ab incarnatione domini）と表示しましたが、これが「キリスト紀元」「キリスト誕生紀元」（anno domini = A. D.）の発端に他なりません。

しかしこの新しい年代表示の方法も一般化せず、やはり伝統的な創世紀元の方が主流でした。ただこの『復活祭の書』はイギリスに伝えられてその地では大きな役割を果たします。イギリスでもそれまで各教会がそれぞれ独自の復活祭表を使用していましたが、それでは不便であるとして六六四年に教会会議を開き、A. D.に統一することになります。そして初めてこの表記法を歴史書に使ったのは八世紀のイギリスの歴史家Beda（Bede）であります。Bedaは「英国史の父」と呼ばれる人物で中世最大の歴史家といわれるように歴史家として立派な業績を残しましたが、その著『イギリス教会史』において年代をA. D.で示しております。例えば紀元四四九年を「主の人の身をとり給いしより四四九年目」という書き方をしております。したがってイギリスの歴史家の中にはA. D.をイギリス人の発明したものという人もあります。そしていわば逆輸入する形で九世紀にヨーロッパ大陸にもたらされたということが出来ましょう。フランク族の王でありながらローマ法王から西ローマ皇帝の称号を与えられたCarolus（Charlemagne）がキリスト教文化の振興に努め国の内外から有能な学者を招いたが、その際イギリスから招かれた二人の学者によってA. D.という年代表記法が伝えられたのです。これ以来次第にヨーロッパ大陸にも普及され、遂に法王庁をも動かすようになって九六三年以降は法王庁でも創世紀元とA. D.とが併用されるようになるのであります。こうしてキリスト誕生紀元が広く使われるようになりますが、ただそれは併記するという形で用いら

れ、A. D. だけが単独で使われることは少なかったといえます。一例を挙げると一二世紀の歴史家でフライジングの司教であったOtto の著書『年代記または二つの国の歴史』があります。ここでいう二つの国とは聖界と俗界を指していますが、この中でCharlemagne がローマ皇帝の帝冠を与えられた年を「主の人の身をとり給いしより八〇一年、ローマ建国以来一五五二年、フランク王即位以後三三年」と表記しています。一番最初に出てくるのがA. D. に他ならず、その次にローマ建国紀元に基く年代があり、最後に古代オリエントのように王の治世年数を掲げております。これを見ても分かるように相変わらず併記がなされているけれども創世紀元がない点に新しさが感じられます。

ところでギリシア人のイリオンの陥落にしても、ローマの建国紀元にしても、あるいはキリスト教の創世紀元にしても、紀元というものは歴史の非常に古いところに設定されるのが普通ですが、それに対してこのキリスト紀元というものは根本的に異なっております。それはむしろAlexandros 紀元やDiocletianus 紀元に近いものがあります。キリスト以後のことを書く場合、特にキリスト教発展史あるいはキリスト教会の歴史等を書くにはキリスト紀元は有用であるといえます。そこではキリスト誕生以前のことは全く無視されています。もっとも中世の西ヨーロッパ社会においては底流には確かにギリシア精神ともいうべきものがあった筈でありますが、当時のゲルマン系諸民族（ヨーロッパ人）はそれに気づいておらず、ギリシア乃至ローマというものは重要視されていないのであります。殊にギリシア語を学ぶことはキリスト教成立以前の野蛮な人の使った言葉として否定されていた頃ですから、古典古代という時代そのものにあまり関心は持たれませんでした。

ところが一四世紀頃からギリシア、ローマなどの古典文化が再評価されるルネサンス時代になると、キリスト教成立以前の優れた文化が人々の関心を集めるようになります。しかも単にギリシアばかりではなく、更にそれの先進文化圏ともいうべきエジプト、西南アジア等の古い文明についての知識が拡大して行くとキリスト教圏以外にも、またキリスト教成立以前にも文化的に優れた民族のあったことが分かってきます。するとこれらヨーロッパ外の国家の古代年代を如何に表記すべきかが問題になってきます。更にインド、中国の文物や歴史が知られるようになると一層この問題が切実になってきます。つまりこれら宗教も文化も違う民族の歴史年代をヨーロッパと同じように創世紀元やトロイア紀元、オリュンピアス、ローマ建国紀元で表現してもどうも馴染めないところがあります。どのように表記すべきかということが問題になっていた時に更に大きな問題が起こります。

それが宗教改革であります。ドイツを中心として一六世紀にカトリックの改革運動が盛んになり、最終的にはローマ・カトリックのキリスト教圏がカトリックとプロテスタントに二分されます。ところでその当時カトリック側の聖書による解釈ではHieronymus 以来の創世からキリスト誕生までを五一九九年とする考え方が依然として継承されております。これに対してプロテスタント側が依拠したヘブライ語版の聖書によるとこの期間が四〇〇四年となる―つまり両者の間で約一二〇〇年の開きがあるわけです。これがきっかけとなって「クロノロジー（Chronology）論争」というものが起こることになります。そして創世からキリスト誕生に至る年数について最長は七〇〇〇年に近いとする説から、最短は三五〇〇年程度とする説に至るまで様々な見解が出されて収

拾つかない状態がしばらく続きます。このように大変クロノロジーが混乱したのでキリスト誕生以降は単にA. D. 丈で表記されることが一般化してきます。しかしこの時代になるとキリスト以前を無視するわけには行かないのでこれを如何に表記すべきかが問題になります。その結果クロノロジー論争が一応収まるまでの一時的な措置として実用的な意味でキリストの誕生年から逆算するという形で出てきた数字（年代）を併記するという方法がとられます。この方法を提案したのは一七世紀のPetaviusという人物でありますが、これを歴史書を書くに際して採用したのは神学者でありLouis一四世の王子の教育に当ったBossuetであるといえます。Bossuetの著『世界史論』は創世からCharlemagneまでの歴史を述べたものでありますが、この年代記的な歴史叙述の中で創世紀元とローマ建国紀元とともに前述のキリストの誕生年から逆算する方法（「キリスト紀元前」＝B. C.）を併記しています。ただこの三つをすべての時代に亘って併記したのではなく、創世からローマ建国までは創生紀元とB. C.を併記し、ローマ建国からキリスト誕生まではローマ建国紀元とB. C.を併記し、キリスト誕生以降はA. D.に一元化されております。そのBossuetの著書は九世紀初期のCharlemagneで終わっているのでそのあとを書き足そうということが多くの歴史家によって企画されますが、その中で最も有名なのは啓蒙思想家としても著名なVoltaireの作品であります。それが『諸民族の習俗・精神試論』（"Essai sur les moeurs et l'esprit des nations."一七五六年刊行）ですが、これは続きを書くというよりも、事実上これまでの歴史の見方を批判する内容のものとなりました。ところでVoltaireは年代を表記するに当たって創世紀元というものは使っておらず、またキリスト紀元という表記も使っておりません。VoltaireはA. D.に替えて「通俗紀元」（ère vulgaire）と表記し、B. C.は「我々の通俗の紀元前」（avant notre ère vulgaire）と言い表しております。ですが、これが事実上「キリスト紀元前」の年代が併記されずに単独に使用された最初であるということができます。

以上のような経緯から見ると「紀元前」という表記はクロノロジー論争で混乱した年代表記を救う手段として使われ始めたものであるならばクロノロジー論争の副産物といえます。使用され始めたのは一七世紀ですが、成立というにはやはり単独に使用されるようになってからとするならば成立年代は一八世紀の後半ということができると思います。したがって一般化したのは一九世紀といえるかもしれません。

ところでこの「キリスト紀元前」という表記法はこれまでの年代の言い表し方と大きな違いがあります。これまでの紀年法はある出来事を起点としてそれから何年を経過したかということを表現するものでありました。ところがB. C.は基点を定めてそこから年数を逆の方向に数えるという方法を取っており、これは歴史的な年代表示としては全くの新機軸であります。ギリシア人は年表を作る際にはある事件を紹介してそれ以来何年を経過しているかを表示しておりまして今を去ること何年前というような言い方は一切しないのであります。つまり年数を溯って数えるというようなことは考えられてはいないといえます。また中世の創世紀元においても創世以前はありえないわけでありますから溯って数えることは全くなかった筈であります。つまり紀元というものが決められるとそこから年数を数えます。紀年というのは紀元から起算した年数でありますが、起算した年というのはそこから後の方

向へ計ることに限られていたわけです。ところが「紀元前」というのは逆に前の方に計る、一つの基点を決めておいてそこから逆の方向へ数える、こういう方法である点が非常に注目すべき新しい方法であるということができると思います。

B. C. は当然のことながらA. D. に直結しますが、B. C. が普及してくるとB. C. とA. D. がそれぞれ一つの時代であるかのように考えられてきます。たしかにキリスト教徒にとっては、キリスト以前の時代は闇であってそれ以後は光である、あるいはキリスト教成立以前は未開、成立以後は文明というようないわば抽象的な表現はあったかもしれませんが、それをはっきりと時代概念として把握していたとはいえません。それを具体的な時代概念として把握したのはRankeであります。一九世紀のドイツの歴史家Rankeが紀元一世紀を過渡期とした二時代区分観というものを打ち立てておりますが、これこそ正にこのB. C. の成立が大きな意味を持っていると思われます。時代区分というのは大体三時代区分法すなわち古代、中世、近世と分けるという方法は一六世紀に表明されて、それ以後これが次第に一般化しておりますが、あえてRankeが二時代区分というものをこの段階で持ち出したのはやはりB. C. とA. D. というものをより歴史的に把握しようとしたためだと思います。Ranke以後Rankeと立場は若干違ってもいろいろな二時代区分論が現れていますが、それらのいずれもがB. C. の成立と定着に触発されたものであることは否定できません。

一方B. C. の効用は古い時代の歴史の年代を表記するのが極めて容易になったことであります。大体一九世紀の後半までは西洋古代史というと紀元前八世紀から紀元後四世紀までということになっていましたが、二〇世紀になってから考古学をはじめとする隣接諸科学の進展によって紀元前八世紀より遥かに溯り得るようになり、現今では紀元前三〇〇〇年ぐらい以降が歴史学の対象となっております。このように古い方向にいくら溯っても敢えて新しい紀年法を考案したり、あるいは紀元というものを設定する必要はありません。それが以前のように古い時点が設定されていて、「そこから何年」という言い方しかないとすると、より一層古いことがわかってくる毎にそれよりももっと古いところに何か紀元を置かなければならないことになります。そうすると非常に混乱しまた新たな形のクロノロジー論争も起こり兼ねませんが、このB. C. を使えばただ数を増していくだけで済むわけですから、年代を表記するのに大変都合がよいことになります。

私どもは西洋特にキリスト教世界で使用されておりますB. C. とA. D. はいわば一組のもののように考えがちであります。しかしそのB. C. とA. D. のそれぞれの成立時期や成立事情を考えてみると、それは全く異なっております。すでに説明したように成立時は大きく掛け離れておりますし、また成立事情も一方は「Diocletianus紀元」を避けるために、他方はクロノロジー論争の副産物として出てきたものであります。言い換えるならば同時に一組のものとして生まれたのではないということを念頭に置くのも無駄ではないと思う次第です。

なお話の内容を多少簡略化するために、今までB. C. と言う言葉を使ってきましたけれども、言うまでもなくこれは英語の表現でbefore Christの略であります。それに対してA. D. の方はanno Dominiというラテン語の表現で、辞書を繙いてみると分

かりますが、anno Domini とその略 A. D. は英語の辞書にもドイツ語の辞書にもフランス語の辞書にも載っております。けれども before Christ や B. C. は英語にしか出てきません。ラテン語では「キリスト紀元前」のことをよく ante Christum と表記し A. C. と略記します。西洋古典学研究者の中には A. C. という表記を使う人もありますが、ただ A. C. と書くと非常に混乱することが一つあります。というのは「キリスト紀元（後）」のことも A. C. とラテン語で表記することがあるからです。すなわち anno Christi の略で意味の上からは A. D. と同じであります。「紀元前」「紀元後」を表記する際にドイツ語やフランス語などの場合はそれぞれ自国語に訳して独自の表現をすることが多いのですが、日本では何故か「紀元前」を B. C. と表現することが普及し国語辞書の中にも「ビーシー」という項目を設けているものさえありますので、上述の混乱を避けるためにもあえて B. C. という表現をいたしましたことを申し添えます。

大変雑駁な話でお聞き苦しい点もいろ〳〵あったと思いますが、私の話はこれで終わらせていただきたいと存じます。

（本稿は一九九四年五月二十七日、大谷学会春季大会で行った講演の要旨を補整したものです。）

主な参考文献

A. Momigliano. Studies in Historiography. N. Y. 1966.
藤縄謙三『歴史学の起源ーギリシア人と歴史』力富書房、一九八三年。
前川貞次郎『歴史を考える』ミネルヴァ書房、一九八八年。